

Prologue
プロローグ

This Is The Sea, 1985(2004 Remastered Version)

Music: The Waterboys

Video: Leonard Winters, 2013

Epilogue
エピローグ

Shot Through The Fog, 2002

Music: Piano Magic

Video: Leonard Winters, 2012

海

プロセス

言葉

アトラス
地図

霧

システム

粒子

コスモス
銀河

第6回都美セレクトショングループ展
企画: エステティック・ライフ+

海のプロセス—言葉をめぐる^{アトラス}地図
井川淳子 中根秀夫 平田星司 福田尚代

2017年6月9日(金)~6月18日(日)
東京都美術館ギャラリーB

スペシャル・トーク
海/プロセス/言葉/地図

霧のシステム—粒子をめぐる^{コスモス}銀河
梅津 元

2017年6月11日(日) 15:00~16:30
東京都美術館スタジオ

梅津 元 [うめづ・げん]

埼玉県立近代美術館主任学芸員/芸術学

1966年、神奈川県に生まれる。1991年、多摩美術大学大学院修士課程を修了。同年より、埼玉県立近代美術館に学芸員として勤務。担当した主な展覧会(共同企画を含む): 「くつつすこと」と「見ること」—意識拡大装置(1994)、「1970年—物質と知覚—もの派と根源を問う作家たち」(1995)、「光の化石—瑛九とフォトグラムの世界」(1997)、「ドナルド・ジャッド 1960-1991」(1999)、「プラスチックの時代 | 美術とデザイン」(2000)、「アーティスト・プロジェクト: 関根伸夫《位相—大地》が生まれるまで」(2005)、「生誕100年記念 瑛九展」(2011)、「竹岡雄二 | 台座から空間へ」(2016)など。

近年の寄稿: 「モダニズムのハード・エッジ」『ABST』6号(2011)、「反転する皮膜—《位相—大地》を奪還せよ」『関根伸夫 RE-CREATIONS 1970/2011』(鎌倉画廊、2011)、「山中信夫—プロジェクション装置としてのピンホール」『マンハッタンの太陽』(栃木県立美術館、2013)、「Sound of the Real 3」『引込線 2015』(2015)、「なぜ、写真を見ることが出来るのか。」「《見ること》と《写真を見ること》—若江漢字に照らして」(カスヤの森現代美術館、2016)など。ギャラリーαM(運営: 武蔵野美術大学)の2016年度ゲスト・キュレーターをつとめ、「TRANS/REAL—非実体的美術の可能性」を企画。

Side

海

井川淳子《すべての昼は夜》2014

中根秀夫「言葉をめぐるアトラス」より

「夜明け前の海。寄せる波音は私たちの身体の内部と外部を行き来する。やがて僅かな白い光が水の面を覆う。白い波は青いガラスの表面を削り、それを砕き、ボトルの内奥の秘められた言葉と文字を選び出す。暗い砂浜に、それは静かに降り積もるだろう。」

「ロラン・バルトは「風いだ海の表面と同じように、私は(写真の表面を)目で走査することしかできない」という。バルトはそれをカメラ・ルシーダ(明るい部屋)という写真以前の写生器具になぞらえる。しかしそれは完全な光の下でプリズムを通して写真を「見る／読む」行為であり、一方で私たちが暗闇の中の僅かな光を受感するには、やはりなおカメラ・オブスクラ(暗い部屋)が必要だ。」(註略)

中根秀夫《A White Day(白い日)》2016

水滴、雨粒、水の流れ、水の循環

平田星司《海のプロセス》2017

断片性、同一性、全体性、垂直性
存在と影、影としての存在

中根秀夫「言葉をめぐるアトラス」より

「展覧会タイトルの『海のプロセス』は、打ち寄せられたガラス瓶の破片の再生、あるいは時間や記憶の再生産とその物語的構築のプロセスを意味するが、それは繰り返される時間の波に磨耗され形を変えて降り積もる「言葉」のイメージでもある。夜明け前の海に立つ時、寄せる波音が私たちの身体を行き来するように、私たちの暗い身体の内側に「光」を受感し「言葉」を受動することについて考察される。」(註略)

プロセス

インターセクション *Under Pressure*
1982

[A]

霧

This is the Sea (プロローグ) 1985

ギュスターヴ・ル・グレイ《海景》1856頃

「海の表面」と「水の循環」

線=境界、波打ち際

面=陸地と海面 海面について

量・容積・空間=「陸上」と「海上」

上空での交通 移動 雲 雨 雪

山中信夫《川を写したフィルムを川に移す》1971

・田中幸人と藤枝晃雄の会話(1993)

「海の表面」と「絵画の表面」をめぐって

・藤枝晃雄「観念のロマンティシズム-物質の消滅」

『美術手帖』1969年7月号

ロバート・スミッソン《Spiral Jetty》1970

中谷英二子《雨月物語》2008

霧=粒子としての水、循環プロセスの遅延「反重力」

榊原淳子《宣言-世紀末オーガズム・プロローグ》

『世紀末オーガズム』(思潮社、1983)

「記憶せよ、水は汚れ反対に石は美くなる」

スティーヴ・ライヒ「緩やかに移りゆくプロセスとしての音楽」(訳:近藤謙)(『エピスメーテ』1978年11月号)

「ひとつの「音楽としてのプロセス」を演奏すること、そしてそれを聴くことは、次のような体験に似ている。／ブランコを引いて、手を放す。そしてそれが次第に静止してゆく様子を観察する。／砂時計を逆さに置き直し、砂が緩やかに下へ流れてゆく様子を見守る。／波打ち際の砂の上に立ち、波が徐々に足を埋めてゆく様子を見、聴き、感じる。」

スティーヴ・ライヒ《振り子の音楽》1968

“It’s the ultimate process piece” by Steve Reich

システム

Music: Queen & Bowie

Video: David Mallet [Official Video]

Side

言葉

福田尚代「片糸の日々」より
『ひかり埃のきみ』（平凡社, 2016）

「それからは言葉の粒子とともに歩きつづけた。ここにはもう、ひとりきりということを超えてわたしすらない、煙雨と粒子、遠い耳鳴り、虹色にきらめく埃と塵。光線が交差する道を歩いてゆく。」

「ふいに気がつく。言葉は人が作ったものではない。水や雪や光の粒と同じく初めから世界にある。人間が存在したことのない宇宙の果てにもそれはある。急に、世界が、森も、氷も、このからだも、言葉の粒子となり霧散して、ひとつになった。幼年時代の恍惚にまた包まれる。」

井川淳子《バベル》2009

「バベルの塔」の反転（グノーシス主義的ではなく）
「翻訳」と「翻字」

福田尚代《エンドロール》2017

発話：音響、ざわめきとしての言葉、非意味
文字：視覚的イメージとしての文字、造形性

井川淳子《アトラス》

塵、埃

Stardust 宇宙塵

銀河～螺旋銀河

霧、煙、埃、塵 — 粒子としての言葉
「反重力」
「光の可視化」

福田尚代《言葉『戯れに恋はすまじ』》2007

井川淳子《すべての昼は夜》2014

エピローグ

地図／アトラス

[B]

粒子

菅谷規矩雄『ロギカ／レトリカ』（砂子屋書房, 1985）より
「ことばがはなす」

菅谷規矩雄「批評的言語について」

『美術手帖』1972年1月号

菅谷規矩雄を参照点として福田尚代への接近を試みしてみる。

「純粹言語の抽出」から「純粹言語の抽出の不可能性」への反転に起因する、言語のメディウム性の全面展開。言葉の意味の情緒的な解釈や、作品の成り立ち（素材、形状、寸法等）の感覚的把握には収斂しえない。それらはすべて表面的な「見え」でしかなく、「ロマンティックなもの」をこえることを可能にする確かな形式が潜在している。（梅津）

富士栄厚「ロバート・スミッソンの《スパイラルジェティ》をめぐる問題ーバベルの塔の倒置ー」『美学』192号, 1998

スミッソンのテキスト配置と菅谷規矩雄の図

ステイーヴ・ライヒ《Piano Phase》?

カール・アンドレの視覚詩

リヒター《アトラス》パネル188（海景）1969

空と海 ル・グレイとの比較

マン・レイ《埃の培養》1920

ウラジミール・タトリン《第三インターナショナル記念塔》1920（モデル）

「霧・の・中・の・幻=影|の|逆|の|影=像・の・中・の・霧」（梅津）
『平面を超える絵画』（武蔵野美術大学, 2016）所収
北園克衛の詩 吉賀あさみの作品タイトル 言葉の視覚性

藤枝晃雄「ロマンティックなものを超えて」

『Art Today ' 80 絵画の問題』（西武美術館, 1980）

Shot Through The Fog

銀河／コスモス